

平成

# 甲府城下町絵図

平成二十四年度 文化庁史跡等及び埋蔵文化財活用事業



作成：山梨県埋蔵文化財センター

〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町 923 tel 055-266-3016

<http://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/>

協力：甲府市教育委員会

「甲府絵図」(山梨県立博物館蔵)

# 見どころ

## ★1・3・14 二の堀・三の堀跡

明治に入り堀の多くは埋め立てられましたが、場所によっては小さな流れに変わしつつ、今日でもかつての二の堀、三の堀の様子を偲ぶことができます。

## ★2 朝日（御金蔵）公園

楽屋曲輪にあった御金蔵を払い下げ、稻荷を勧請した御金蔵稻荷があります（当時の建物は空襲で焼失）。公園の脇を二の堀が走っています。



## ★4 甲府上水

甲府築城の時浅野長政の命により、飲料に適する水が出なかった甲府の町に、相川や荒川から水を引入れる甲府上水が敷かれました。水路には石製だけでなく木製のものも使われたので、度々の修理が行われました。

## 甲府の金魚

現在金魚で有名な大和郡山市ですが、柳沢氏が甲府を去る時、家臣の横田又兵衛が鑑賞用に持参した事が起源といわれています（諸説あり）。当時の甲府では金魚を珊瑚樹魚といって珍重していて、吉里の重臣である柳沢里恭が描いた金魚の絵も残っているそうです。

## ★5 清水曲輪跡

北口整備事業に伴う発掘調査で確認された、清水曲輪の石垣が保存展示されています。9メートルの高さがあったと云われ、現在残るのは半分ほどの高さである事が確認されています。



## ★6 藤村記念館

旧睦沢学校校舎。睦沢村（現在の甲斐市亀沢）から武田神社内に移築されていましたが、近年現在地に移されました。国重要文化財。



## ★7 三念坂改修碑

かつて凸凹した悪路だったこの坂は、有志の寄付により改修されました。「ここで転ぶとよくない事が起こるから念には念を入れて歩きなさい」というのが名前の由来といわれています。



## ★8 石切場

甲府城の愛宕山石切場。ここで切り出した石は甲府城築城の際、三念坂を通り、藤川を下って城内へ運び込まれ、石垣石材として使われました。県指定史跡。



# 寺社

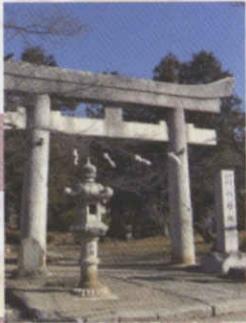
## □1 大泉寺

浅野長政により、慶長の役での戦死者を弔った碑が建てられています。甲府城主柳沢吉保の菩提寺であった永慶寺（現在の護国神社地から大和郡山市に移転）の山門が、総門として移築されています。武田信虎の菩提寺です。



## □2 甲斐惣社八幡宮

武田信虎が石和から武田館の西側に移し、府中八幡（現在の古八幡）と呼ばれていましたが、甲府城築城の際に現在地に移されました。名も改められて城の鎮守として篤く庇護されました。府中五社。



## □3 妙遠寺

1590年代、加藤清正が朝鮮の役で出兵した際に、持ち帰ったとされる玉すだれがあります。武田陣中守護として祀られた毘沙門天像も安置されています。

## □4 八雲神社

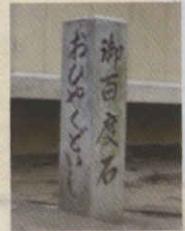
甲府城の鬼門よけとなっている神社です。疫病災害除けに御利益があるとされ、人々の信仰を集めていました。もとは祇園寺というお寺でしたが、明治の神仏分離により名前が変わりました。

## □5 愛宕神社

武田信玄が、相模国愛宕山から持ち帰った勝軍地藏を、古城の鬼門鎮守のために古府中に勧請したのが始まりといわれています。後に徳川家康が現在地に移し、さらに甲府城鬼門鎮守の神として再勧請されました。府中五社。

## □6 成田不動

「おひやくどいし」があり、愛宕山山麓の美しい景観が見られます。



## □7 長禅寺

甲府五山の一つであり、武田信玄生母である大井夫人のお墓があります。

## □8 庄城稻荷

もとは一条忠頼が館内に守護神として勧請した稲荷社でした。甲府城が築かれた後も稲荷曲輪内に残されていましたが、明治維新後に現在地に移されました。今は甲府の街の守り神として大切にされています。



## □9 横近習大神宮

武田家の崇敬も篤く、信虎により古府中に勧請されましたが、浅野時代に当地に遷座されました。江戸時代から続く、節分に年男が鬼の面をかぶり、町へくりだす儀式「だいじんさん」は、今でも毎年多くの人々に親しまれています。伊勢神宮外宮の札所となっています。

### ★9 城北新道開鑿碑

中央線開通に伴い停車場が造られた事により、近隣住民の東西の通行が分断されました。そこで城郭を一周するように堀を埋め、石垣を崩して道を開鑿した事を記念して建てられた石碑です。



### ★10 明治期鉄道高架

中央線敷設当初の煉瓦積みを確認する事ができます。他に、朝日町ガード・横沢通りガード等にも残っています。

### ★11 徽典館碑

寛政年間(1789-1801)に創られた甲府学問所を、享和3年(1803)に追手門南地(談露館付近)に移築し、徽典館としました。明治になり山梨師範学校と改称して中央公園地に移転、明治15年に徽典館と名を復した事から、この場所に碑が建てられました。



### ★12 新聞発祥の地碑

山梨最初の新聞『峡中新聞』が発行された書店温古堂のあった場所です。

### ★13 甲府法人会館

大正15年(1926)に建造された、県内現存最古のコンクリート製近代ビルです。アールデコ調の装飾や、美しいステンドグラスが見学できます。登録有形文化財。



### ★15 河岸跡

明治3年(1870)に出された濁川改修の願出により、笠森稲荷付近に繫舟場がおかれました。富士川を上って濁川に入った舟が、この地で荷を下ろす様子は、昭和三年の身延線開通の頃まで見られました。

### ★16 時の鐘跡

江戸初期、旧横近習町にあった歎喜院に置かれていた時の鐘は、柳沢時代に愛宕の石切場南の地に移されました。明治に入り、鐘の音が空砲に変わって「ドン」と呼ばれ親しまれましたが、近隣に時を告げてきた音も昭和の開戦と相前後してその役目を終えました。



今も通り名に残る旧町名



時の鐘スタンプ

### 甲斐の代官所

幕府直轄領時代に国中地方の民政担当として甲府・上飯田・石和の三分(三部)代官が置かれていました。代官所(陣屋)はそれぞれ旧富士川小跡地・旧穴切小門前付近・石和南小学校地に比定されています。他に市川三郷町の市川陣屋、郡内の谷村陣屋や、「御三卿」領に伴う田安陣屋(山梨市)、一橋陣屋(韮崎市)、清水陣屋(山梨市)等も置かれました。

甲府
12月
正和
天正
文祿
慶長
万治
元禄
宝永
享保
延享
明和
寛政
享和
文政
天保
嘉永
文久
明治

### □10 山八幡

武田家隆盛の頃、竜王町西八幡から八日市場（旧横近習町辺り）に勧請され崇敬を受けていましたが、甲府築城の折、社地から巨石が取れた為に現在地に移され旧地は石取場となりました。「八宮良純親王御旧跡」を記す石柱や、天明四年記銘の水鉢などがあります。



享保十五年銘  
「三猿」付庚申塔



### □11 瑞泉寺

慶長年間に徳川氏より現在地を与えられ、移転しました。甲府五ヶ寺。

頭だけの不思議なお地藏様  
悩みをひきとるといふ「ひきとり地藏」



### □14 教安寺

甲府城代平岩親吉が、夭逝した養子の仙千代（徳川家康の八男）の菩提を弔ったお寺です。境内地にお墓が残ります。かつて亀屋座（芝居小屋）があり、五代目市川團十郎が興行を行いました。甲府五ヶ寺。



### □15 笠森稲荷

五穀豊穰・商売繁盛を祈った神社です。

### □16 車地藏

六地藏を刻んだ石に木の屋根が乗せられた、めずらしい地藏尊です。名前は、船着き場が近く、車が集まった事に由来するといわれ、願い事をして中の地藏が回ったら叶うという伝説があります。



### □17 文殊稲荷

文殊（知恵）を司る菩薩を祀っています。

### □18 金山神社

鍛冶職人が多く住んだ町の鎮守として祀られています。境内には、昭和の戦火を逃れたコンクリート製の祠が残っています。



### □19 柳町大神宮

武田時代からの由緒を持つ老舗、元塩問屋だった吉字屋の屋敷神といわれ、「だいじんさん」では会社の新入社員が鬼に扮し街に繰り出します。伊勢神宮内宮の札所である当社と横近習大神宮の両方を参拝すると、「お伊勢参り」と同じ効力があるといわれています。

□20 桶職  
てい

□21 信玄  
遠寺  
真立  
浅野

□22 信立  
の信

□23 800  
にと  
まし  
や柳

□24 城下  
門・  
の尊  
殿と  
れて  
ます

□25 山門  
門は  
築さ  
れて

□26 所願  
正（  
自由  
嫁で

### □20 山神社

桶職人が多く、扱う木材が取れる山を祀っています。

### □21 信立寺

信玄の父、信虎により建てられ、身延山久遠寺の他屋としても機能しました。もとは真立寺といい、穴山小路にありましたが、浅野時代に現在地に移されました。

### □22 一實稲荷

信立寺の鎮守として建てられ、地元の人々の信仰を集めています。

### □23 一蓮寺

800年以上の歴史を持ちます。甲府城築城にともない、城下町南端の現在地へ移されました。武田信玄の筆とされる渡唐天神図や柳沢吉保の肖像画が残されています。

### □24 穴切神社

城下百石町口の門を当社に因んで穴切御門・坤方の御門と呼ぶなど、甲府勤番からの尊崇を受けていました。重要文化財の本殿と隨身門は桃山時代の建造。境内裏を流れていた甲府上水の名残を今も確認できます。府中五社。

### □25 慶長院

山門となっている冠木門は、甲府城内から移築されたものと伝えられています。



### □26 清運寺

所願成就の神として、神格化された加藤清正（せいしよこさん）が祀られています。自由民権家の小田切謙明や坂本龍馬の許嫁であった千葉佐那子の墓があります。

### □27 御崎神社

武田家の屋敷神として石和から躑躅ヶ崎館内に勧請されていましたが、武田氏滅亡後に甲府城と城下町の乾の鎮守として現在地へ移されました。府中五社。



貞享五年記銘の「三猿」石灯籠

### □28 金幣稲荷

尊躰寺の旧地で、天正10・11年に徳川家康が来甲した時に在陣した寺である事を記した碑が残っています。稲荷はかつてこの辺りに遊郭があった時に、遊女の守り神として祀られました。



### □29 法華寺

天平9年（737）に全国に造られた国分尼寺の一つで甲府城築城に伴い現在地に移されました。徳川將軍家の祈願所でもあり、「三葉葵」の紋の使用を許されました。寺の裏に、三の堀に伴う土塁跡と見られる盛土が現在も確認できます。

## 甲州三法

江戸時代、様々な事柄が全国で統一されましたが、甲斐の国だけに旧来のまま許されていた制度がありました。

**大小切税法：**甲斐の納税は米・銭の混合納でした。（一般には全米納）

**甲州金：**武田時代からの甲州金（古甲金）や新たに鑄造された甲州金（新甲金）を使う事ができました。

**甲州枮：**「国枮」といい、京枮より大きな一升枮（京枮3升分）・一升枮の1/4の「はたご」・その1/2の「なからせんじ」・さらに1/2の「小なからせんじ」の四種が使われていました。（時期・地域により相違あり）

## 甲府城下町関連年表

12世紀後半	一条忠頼、一条小山に居館を置く
正和 元(1312)	一条時信、館地に一蓮寺を開創
天正 10(1582)	武田氏滅亡
13(1585)	.1 家康、一条小山に新城建築を計画
18(1590)	.8 家康、関八州へ移封となり、代わりに秀吉の甥の羽柴秀勝入府。甲斐が豊臣領となる
19(1591)	秀勝が美濃岐阜城へ移封、後を加藤光泰が拝領する
文禄 2(1593)	.11 文禄の役に参加した光泰が釜山で没し(8月)、その後を浅野長政・幸長父子が拝領。甲府城の普請始まる
3(1594)	長政検地「弾正縄」を行う。貫高制から石高制へ
	文禄～慶長期、甲府城築城・城下町建設に伴い多くの寺社が移転
慶長 4(1599)	築城のため一蓮寺を移転
5(1600)	.10 関ヶ原合戦後浅野父子が転封(これまでに甲府城完成)。後に平岩親吉が城代として入国。甲斐が徳川領となる
万治 3(1660)	.1 九蔵火事。これより火消人足制度。各組150人4組600人の人足で火消組編成
元禄 2(1689)	甲斐府中の町民14334人になる(江戸時代最盛期)
16(1703)	11.23 元禄大地震。富士山鳴動
宝永 元(1704)	.12 大老柳沢吉保、甲斐拝領が決まる
4(1707)	10.4 宝永大地震。49日後富士山噴火。記録上最後の噴火
6(1709)	.5 吉保大老職を退き隠居、嫡子吉里が家督を継ぎ甲斐に在国
享保 9(1724)	吉里、大和郡山へ転封。徳川直轄領になり、甲府勤番制度が始まる
12(1727)	.12 裏先手小路の家臣宅より出火、連雀口付近まで類焼
延享 元(1744)	新しい火消組組織として八町組・十二町組・上府中組が編成される
明和 2(1765)	教安寺境内に本格的芝居小屋亀屋座が開設
寛政 3(1791)	五代目市川団十郎、板東三津五郎・森田勘弥らと興行
享和 3(1803)	追手門前に徽典館を創設。前身は甲府学問所(勝手小普請役富田武陵宅)
文政 5(1822)	市川海老蔵(七代目団十郎)が松本幸四郎らと亀屋座で興行
3(1830)	甲府工町浅間神社(甲斐奈神社)において、富籤興行開催(3年間)
天保 7(1836)	天保騒動。郡内で蜂起した暴徒が甲府に乱入
12(1841)	.4.5 幕絵制作の依頼を受け、歌川広重来甲。伊勢屋に滞在
嘉永 7(1854)	.11.4 南海諸道に地震(安政の大地震)。下府中の被害甚大。終日36回程の揺れ。余震が15日まで続く
文久 2(1862)	7月麻疹、8月コレラ流行。この頃(今から約150年前)村松岳佑、広瀬元恭らによって県内に種痘が広がる
明治 元(1868)	大政奉還、明治維新。官軍入城

## 甲府城ゆかりの人々

徳川家康	天正 10 年(1582)から天正 18 年(1590)まで支配。
平岩親吉	徳川家康の家臣、家康支配の期間、城代として配される。一条小山に縄張りを行い甲府城築城を開始する。甲斐の豊臣支配を経た後、慶長 6 年(1601)に再び城代に、徳川義直が甲斐に封ぜられると、幼少の城主の城代として慶長 12 年まで在府した。
羽柴秀勝	豊臣秀吉の甥。天正 18 年(1590)家康関東移封後支配。築城を示唆するも半年で岐阜城へ移封。
加藤光泰	豊臣秀吉の家臣。天正 19 年(1591)から文禄 2 年(1594)まで支配。築城に関する記録を多く残す。墓所が善光寺にある。
浅野長政 浅野幸長	光泰没後、文禄 2 年(1593)から慶長 5 年(1600)まで嫡男幸長とともに支配。発掘調査により、城内各曲輪から朱や金箔が施された豊臣家家紋瓦や、浅野家家紋瓦が多量に出土しており、浅野の支配期間に甲府城が築城されたことが確認できる。
徳川義直	徳川家康の 9 男。兄の仙千代は平岩親吉の養子となる。正室は浅野幸長の娘春姫。慶長 8 年(1603)25 万石で甲府城主となるが、甲府には赴かなかつた。兄の松平忠吉の死去により、清洲藩主、家康の死後尾張徳川家の祖となる。
徳川綱重	寛文元年(1661)から宝永元年(1704)まで支配。三代将軍家光の四男で、綱豊(6 代将軍家宣)の父。寛文 4 年(1664)から約二年間大規模な修復を行う。甲府藩をたてた。
柳沢吉保	5 代将軍綱吉の側用人。宝永元年(1704)から享保 9 年(1724)まで甲府藩主となるが、甲府へは赴かず、江戸詰であった。宝永 3 年(1707)には城内外の大改修を行った。発掘調査では柳沢家の家紋瓦が出土している。綱吉死去に伴い家督を譲り引退。
柳沢吉里	吉保の子。吉保の引退により甲府藩主となり、来甲。在府した唯一の藩主。父の政策を引き継ぎ、甲府城下の整備に力を入れる。治水事業にも功績がある。甲斐八景を撰するなど文芸にも造詣が深く、自ら能を舞い、町民にも見物を許した。善政を敷いたが、享保 9 年(1724)大和郡山へ転封となる。出立の日には多くの見送りを受けたという。
徳川忠長	徳川秀忠の子。母は浅井長政の娘お江与。3 代将軍家光の同母弟。元和 4 年(1618)甲府城主となるが治世は家臣団がおこなつた。寛永 9 年(1636)家光により甲府へ蟄居命令。駿河、甲斐を没収され高崎城で自害(享年 28)
大久保長安	元は武田家家臣(お抱え猿楽師)。黒川金山などの開発を担当。後に徳川の家臣となる。武田滅亡後、徳川の家臣となり異例の出世を果たす。慰霊塔が尊躰寺に残る。

□1

浅野  
長の  
吊つ  
てい  
柳沢  
あつ  
の護  
和郡  
山門  
移築

□2

武田  
武田  
府中  
八幡  
まし  
城の  
され  
めら  
して  
した

□3

1590  
に、  
す。  
も安

# 甲府城下町絵図



「武田城下町遺跡」の範囲

甲府五ヶ寺  
武田氏とも所縁の深い、浄土宗のお寺

- |     |     |
|-----|-----|
| 尊躰寺 | 教安寺 |
| 普願寺 | 来迎時 |
| 瑞泉寺 |     |



愛宕神社より甲府城を望む

甲府八景  
柳沢吉里が撰した甲斐の名景

- 夢山春曙
- 石和流螢
- 竜華秋月
- 金峯暮雪
- 富士晴嵐
- 酒折夜雨
- 恵林晚鐘
- 白根夕照

「甲府城下町遺跡」の範囲





500m

27

28

29

26

豎町口

元連雀町口

元城屋町口

愛宕町口

山手小路

清水槽

山手門

家老  
敷田五郎右衛門

御山手  
役宅

家老  
柳沢権太夫屋

新先手小路

裏先手小路

御先手小路

桜小路

橋小路

森下小路

広小路

豎町

置町

細工町

元連雀町

新紺屋町

元城屋町

三の堀

横田町

元緑町

元穴山町

久保町

手子町

元柳町

増山町

平成

甲

国立甲府病院  
附属看護学校

御崎神社

福壽院

玄法院

山梨県治山林

新紺屋小学校

甲府府金  
車務センタ

甲府合同庁舎

甲府府  
大蔵省  
同業対話局

七会館

納戸小路

3

5

6

馬場

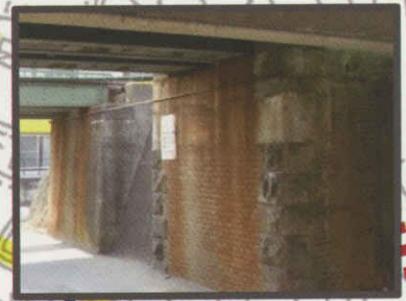


夢山春曙  
石和流螢  
竜華秋月  
金峯暮雪  
富士晴嵐  
酒折夜雨  
恵林晚鐘  
白根夕照

「甲府城下町遺跡」  
の範囲



富士川小の一角にあった陣屋跡の碑。現在は撤去保存されている



長善寺架道橋。明治期の壁が残る

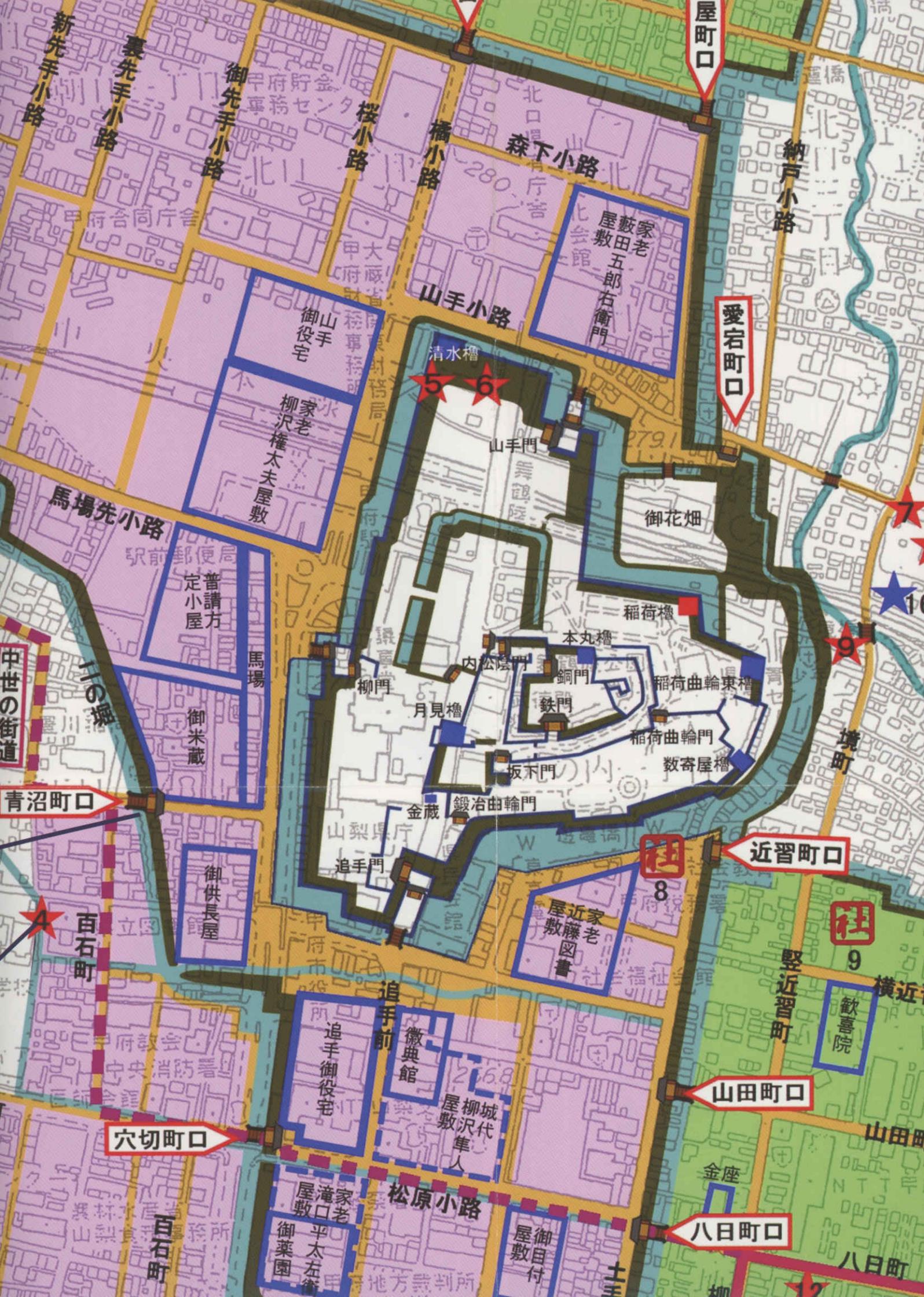
府中五社

浅野氏が甲府城を築いたとき、城中加護の祭事を命じられた神社

府中八幡神社

御崎神社  
穴切神社  
柴宮神社  
浅間神社（甲斐奈神社）





屋町口

納戸小路

愛宕町口

近習町口

山田町口

八日町口

穴切町口

青沼町口

中世の街道

百石町

百石町

御先手小路

裏先手小路

新先手小路

桜小路

橋小路

森下小路

山手小路

馬場先小路

二の堀

山手御役宅

家老柳沢権太夫屋敷

普請方定小屋

御米蔵

御供長屋

追手御役宅

徽典館

柳沢代官屋敷

家老滝口屋敷

平太左衛門御薬園

御目付屋敷

家老敷田五郎右衛門

清水槽

山手門

御花畑

稻荷槽

本丸槽

稻荷曲輪東槽

稻荷曲輪門

数寄屋槽

銅門

鉄門

板下門

月見槽

鍛冶曲輪門

金蔵

山梨県庁

追手門

家老近藤屋敷圖書

欽喜院

金座

松原小路

土手

柳

八日町

山田町

横近

近習町

境町

7

10

9

8

5

6

9

10

11

12

二の堀の鉤手遺構が確認出来る（朝日公園西側）



住宅街を走る二の堀

横沢町口

下横沢町

相川町

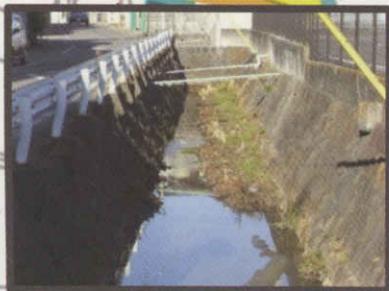
相川町口

中世の街道

青沼町口

百石町

穴切町口

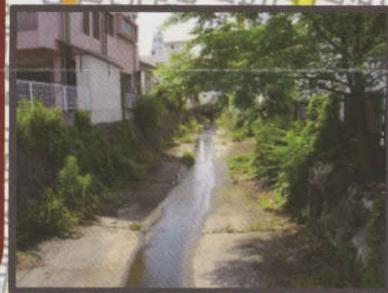


二の堀跡（共立病院北側）

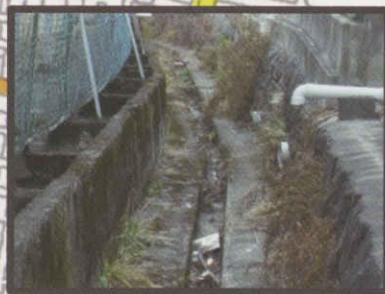
甲斐八珍果

柳沢氏の頃には全国に知られていた甲斐の名果

ブドウ モモ ナシ  
リンゴ クリ カキ  
ザクロ クルミ



忠徳橋より二の堀を望む



甲府上水跡（県立図書館裏）



上水道跡（穴切神社裏）

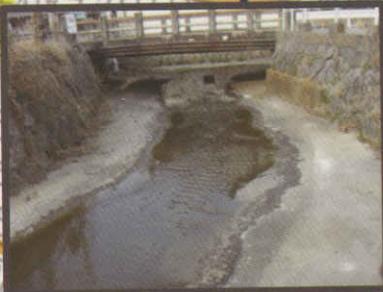
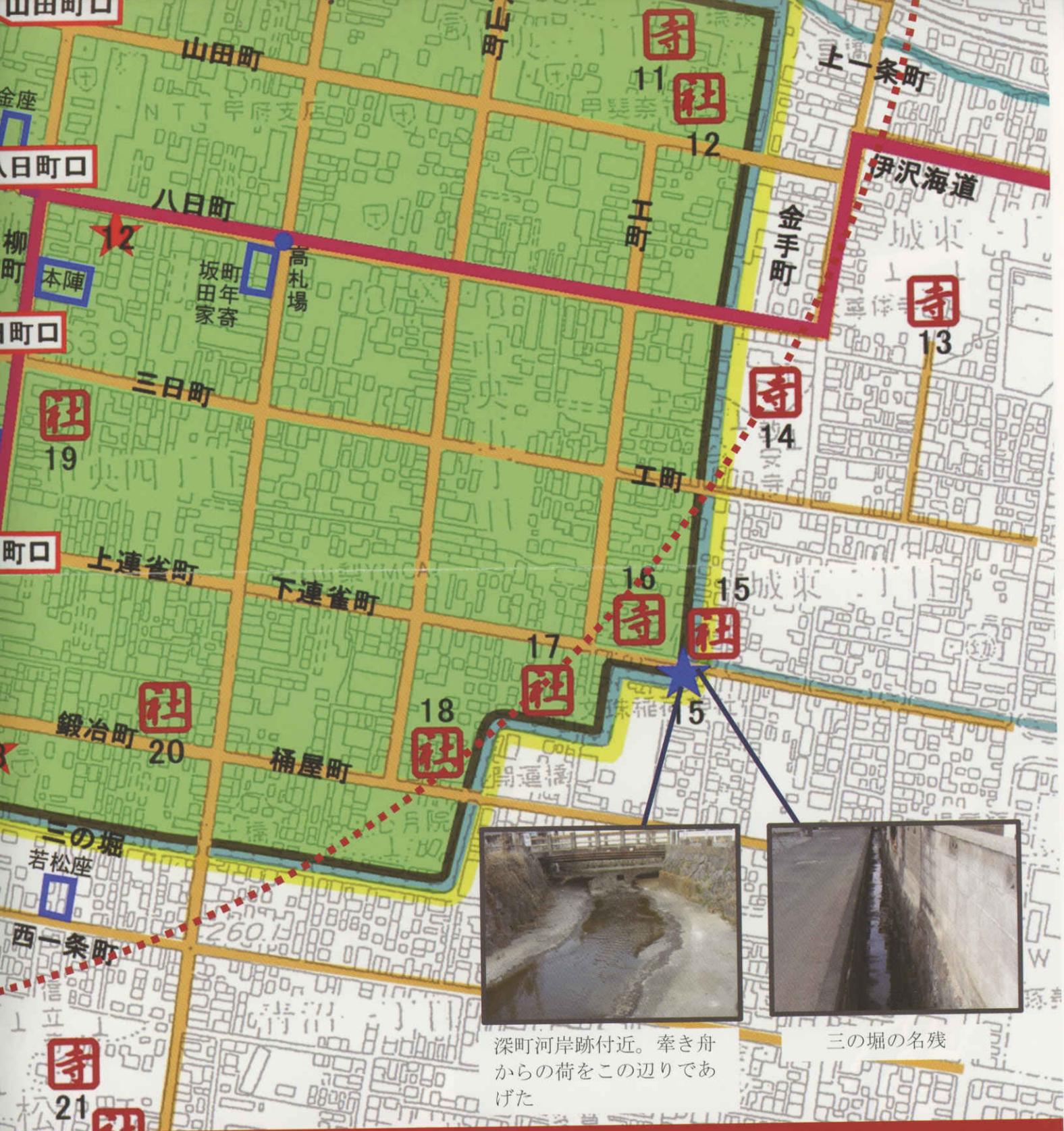
飯田代官所  
(推定)

24

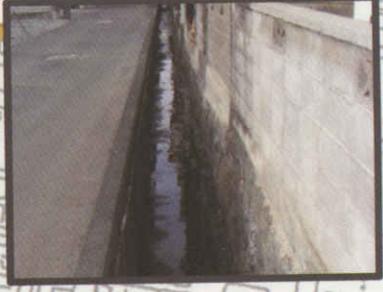
田町

百石町

御菜園



深町河岸跡付近。牽き舟からの荷をこの辺りであげた



三の堀の名残

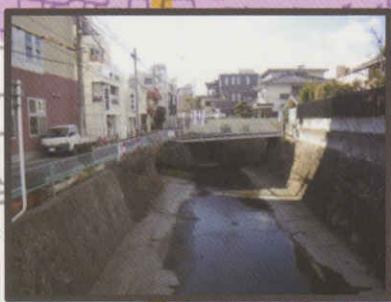
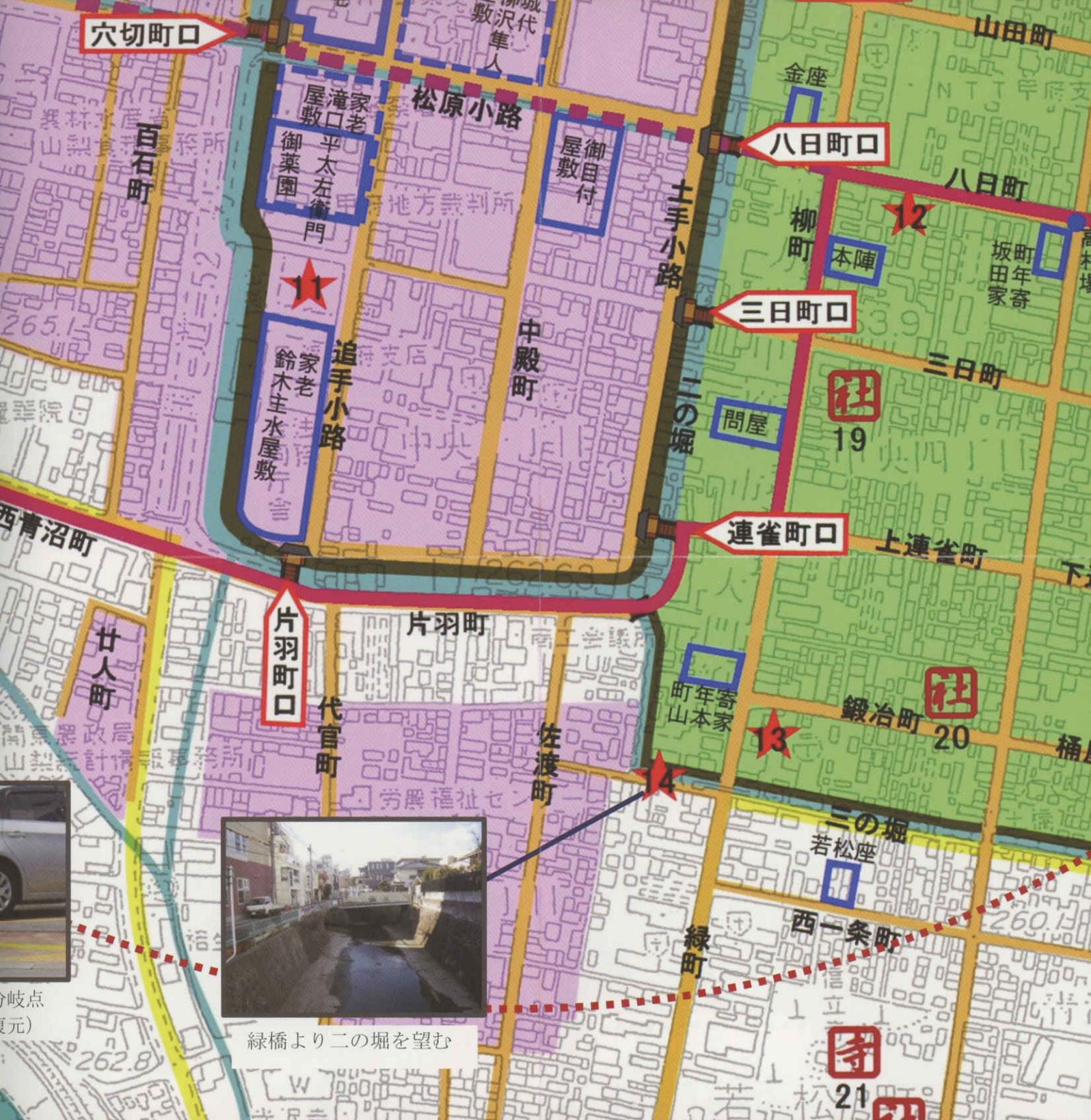
敷地  甲府城跡より凡そ徒歩 30 分圏内 (禁無断複製転載)

★8 石取場 ★9 城北新道開鑿碑 ★10 明治期鉄道高架 ★11 徽典館碑 ★12 新聞発祥

大神宮 □10 山八幡 □11 法泉寺 □12 甲斐奈神社 □13 尊躰寺 □14 教安寺

□23 一蓮寺 □24 穴切神社 □25 慶長院 □26 清運寺 □27 御崎神社 □28 金幣

については「嘉永二年甲府絵図」(山梨県立博物館蔵: 1849) を基本とし、必要に応じて追記した



緑橋より二の堀を望む

- 堀・上水道・河川    ■ 土塁    □ 主な施設・屋敷地    ○ 甲府城跡よ
- で確認出来る遺跡    青字 今は確認出来ない遺跡
- ★4 甲府上水    ★5 清水曲輪石垣    ★6 藤村記念館    ★7 三念坂    ★8 石取場    ★9 城北新道開
- ★16 時の鐘跡
- 5 愛宕神社    □6 成田不動    □7 長禅寺    □8 庄城稲荷    □9 大神宮    □10 山八幡    □11
- 19 柳町大神宮    □20 金山神社    □21 信立寺    □22 一実稲荷    □23 一蓮寺    □24 穴切神

とし、一部は同時期の他絵図や発掘調査報告書を参考に作成した。町名等については「嘉永二年甲府絵図」



上水道跡 (穴切神社裏)



甲府上水跡 (県立図書館裏)

穴切町口

百石町

田町

小砂町

飯田新町

信州道

西青沼町

身延道

廿人町

鈴木主水屋敷

片羽町口

甲府五山

武田氏の時代に京都・鎌倉五山に模して定められた、臨済宗のお寺

- 長禅寺
- 円光院
- 法泉寺
- 東光寺
- 能成寺



身延道と信州道の分岐点に置かれた道標 (復元)



緑橋よ

21 寺社

23 寺

伊勢屋 (歌川広重が逗留)

一蓮寺周辺

- 凡例 . . .
- 武家地 (pink square)
  - 町人地 (green square)
  - 小路 (yellow square)
  - 堀・上水道・河川 (blue square)
  - 見所 (star)
  - 寺社 (square with border)
  - 櫓 (black square)
  - 赤字 (red text)
  - 現存・復元・石碑等で確認出来る遺跡 (black text)
  - 青字 (blue text)
- ★1 三の堀跡の地碑
  - ★2 朝日 (御金蔵) 公園
  - ★3 二の堀跡
  - ★4 甲府上水
  - ★5 清水曲輪
  - ★13 甲府法人会館
  - ★14 三の堀跡
  - ★15 河岸跡
  - ★16 時の鐘跡
  - 1 大泉寺
  - 2 甲斐惣社八幡宮
  - 3 妙遠寺
  - 4 八雲神社
  - 5 愛宕神社
  - 6 成田
  - 15 笠森稲荷
  - 16 車地藏
  - 17 文殊稲荷
  - 18 山神社
  - 19 柳町大神宮
  - 20 金
  - 29 法華寺

※ 小路については「甲府城下絵図」(柳沢文庫蔵：柳沢時代)を基本とし、一部は同時期の他絵図や